

野沢温泉村への学生派遣プログラム 2016

テーマ 明治大学発『野沢温泉物語』を考える。

野沢温泉村では、2013年度から野沢温泉村のきれいで豊かな水をベースにした商品を開発するとともに、新たに「野沢温泉物語」ブランドとして6商品を認定し、村内外に発信している。これまで、村内の生産者などで行く「野沢温泉物語お米部会」が考えた減農薬・減化学肥料による特別栽培米のコシヒカリ「村の御用達米」などが、野沢温泉村の一滴を使った商品として販売されている。

今回の活動を通して、「野沢温泉物語」の1つとなる村の魅力が詰まった、新しい商品を考案する。

東京・明治大学での事前学習

派遣学生への事前説明会及びグループワーク（6月10日）

今年度のプログラムに参加する学生が初めて一堂に会しての第1回目のガイダンス。当日は、野沢温泉村から担当職員を招き、今年度のテーマである「野沢温泉物語」について、野沢温泉村の取り組みや、今後の方針、村の特長・課題点等についてのレクチャーを受けた。

レクチャー終了後には、学生たちは村役場の担当職員を交えグループワークに取り組み、6月下旬に控える事前調査に向け、興味を持ったことや現地で確認すべきことについて賑やかに意見を交わした。



現地事前調査

6月25日から26日に、野沢温泉村での事前調査を実施。はじめて現地を訪れる学生が、まずは野沢温泉村の魅力を感じ、9月の現地調査に向けての課題抽出や、新しい発見をすることを目的とした。

村役場職員との打合せ（6月25日）

明治大学駿河台キャンパスからバスで出発した一行は、現地の道の駅に立ち寄り、地元の産物などを視察した後、昼過ぎに野沢温泉村役場に到着。役場会議室において、滞在中お世話になる村役場の関係者に自己紹介を行い、グループごとに事前調査の視察先を話し合った。その後、村内視察を行ったグループもあり、外湯などの観光資源や、道祖神の歴史など、村独自の文化に触れた。また、若い人が地域を支えていることに驚きの声もあった。

夜は、宿でグループワークを実施。新たに気づいたことや、企画の方向性、9月の現地調査で取り組むことの整理など、深夜まで話し合いを行った。



村内視察（6月26日）

この日は、早朝から「野沢温泉朝市」を視察。早朝にも関わらず多くの人で賑わっていた。

役場のバスで巡る村内視察では、はじめに「ふるさと物流センター ねんりん」に立ち寄った。野沢温泉村ならではの農産物やお土産を見学し、「野沢温泉物語」考案のヒントを得た。その後、夏のスキー場を視察。現地を訪れた6月は、スキー場のリフトは停止していたが、東京では決して味わうことができない豊かな自然と爽やかな空気の中、学生達は羽を伸ばしていた。

さらにこの日は、上ノ平高原から下りる途中で「見晴台」のほか、「日本スキー博物館」、「野沢温泉スパリーナ」を見学した。特に「スパリーナ」では、天然雪を貯蔵し、夏場に雪解け水を使って冷たい空気を館内に送りこむ「雪室冷房システム」を見学し、豪雪地帯ならではの工夫を知ることができた。

村役場に戻った後は、東京に戻ってからの作業方針の整理と、役場職員からのアドバイスをもらうために、グループワークを実施し、帰京した。

本格的に商品検討を開始するにあたり、有意義な2日間となった。



東京・明治大学での研修

事前研修「ワークショップとファシリテーション」（7月8日）

学生派遣プログラムでは、実際に現地で得た情報をグループで整理し、提案に活かしていくことが求められる。良い提案を行うためには、各自がアイデアを持ち寄り、効果的にグループワークを進めることが必要である。この研修では、源 由理子 専門職大学院ガバナンス研究科教授を講師として招き、グループワークの意義、ファシリテーター（進行役）に求められる役割、グループ内で良いアイデアを引き出すための技術などについて学んだ。その後、「地域のブランド力向上」をテーマにグループワークを行い、講義で学んだことを実践する時間を設けた。

事前研修「地域について考えるヒント」（7月30日）

「野沢温泉物語」に認定される商品は、土地のものを利用しただけでなく、地域のブランド力向上に寄与するものでなくてはならない。そのため、企画にあたっては、その地域の特長をよく見定め、その魅力をいかに向上・発信させていくかを考える必要がある。

この研修では、木寺 元 政治経済学部准教授を招き、これらの考え方を学び、その後のグループワークでは、具体的な商品案を考えた。

さいごに、これまでの学習を踏まえ、8月の自主学習と9月の現地調査の進め方をまとめ、出発前の研修を終えた。



現地調査

9月5日～9日に、現地調査を実施。この4泊5日の「現地調査」は、6月下旬に行った事前調査や東京での事前研修で得た情報やアイデアを、さらに深化・発展させるために行った。限られた時間の中で効率的な取材を行うために、村役場の協力を得て、グループごとに綿密なスケジュールリングを行った。

村長・観光協会事務局長・明大OBとの懇談会（9月5日）

明治大学駿河台キャンパスをバスで出発し、昼過ぎに野沢温泉村へ到着。村役場へ向かい、富井俊雄村長との懇談会を実施した。村長からは「野沢温泉物語」ができた経緯や、村のPRポイントが湯量の豊富な温泉や、天然雪のスキー場など、村にあるものをそのまま活かした、飾らない「リアリティ」であることなど、今回の課題に対する提案への期待とともに、貴重な話を聞くことができた。その後、観光協会において、事務局長の森博美氏から、村の観光政策や広報活動に関することのほか、村の文化についても話を聞くことができた。

夜は、グループごとに初日の振り返りと翌日以降の取材スケジュールを確認するとともに、明治大学OBで現在は野沢温泉村に住む富井亮太氏を招いて、東京と地方の暮らしの違いについて話を聞くことができた。



現地での取材・灯籠祭り（9月6日～8日）

2日目以降はグループに分かれての調査活動を実施。それぞれが企画する商品案をより具体化するために、学生たちはお店や宿泊施設、小学校や中学校などを訪問し、関係者への取材を行った。それらの情報を宿に持ち帰り、連日夜遅くまでグループワークに取り組んだ。

また、全員共通で把握しておくべき情報については、野沢温泉物語の担当課である村役場企画財政係の松村郁雄氏や、株式会社野沢温泉の片桐幹雄社長、商工会の望月喜好会長より、役場の会議室で話を聞くことができた。

4日目の夜は、毎年9月8日に開催される灯籠祭りを視察した。このお祭りは江戸時代中期から後期の間に始まったと推測されており、村を挙げての一大イベントである。学生たちは、露店や華々しく打ちあがる花火、大迫力の猿田彦の舞などを楽しみ、村独自の文化を体験しながら学ぶことができた。



意見交換会（9月9日）

最終日は、現地調査の振り返りと10月の報告会に向けたまとめを行うために、村役場で各グループの進捗報告と意見交換会を実施した。各グループが2回の現地調査で学んだ成果として企画案の発表と、別グループからの質疑応答を行った。この段階では、整理すべき課題が各グループに見られたほか、具体的な商品案が出ていないグループもあり、役場担当職員及び小池保夫教授からのアドバイスを受け、東京で成果報告会に向け

た作業を各グループで行うことになった。



成果報告会

野沢温泉村での最終成果報告会（10月31日）

現地調査から約1か月半、学生たちは各グループで企画内容を練り、発表練習に何度も取り組み、当日を迎えた。成果報告会の会場は村役場で、関係者のほか、地域住民の参加も多数あり、学生の提案を村全体で考える機会となった。発表内容は、村のきれいな水を活かした「水まんじゅう」や「フルーツかき氷」、村に古くから根付く食材をつかった「飲む！野沢菜」などの商品提案のほか、それらのプロモーション戦略についても提言があり、「野沢温泉物語」についての総合的な提案がなされた。（詳細は、後出の「成果報告書」を参照）

閉会に際し、萩原正敏副村長は「村内で生活していると気づかない野沢温泉村の新たな個性が見えた。本日の提案を実現に向けて検討していきたい。」と述べ、学生の提案が、今後の「野沢温泉物語」の展開に影響を与える成果報告会となった。



富井俊雄村長をはじめ野沢温泉村役場関係者のみなさん、取材に快く応じてくださったみなさん、ご支援・ご協力いただき、誠にありがとうございました！